

第5回「100人委員会」レポート

乾杯運動の支援強化へ、意見交換のひと時
早大・河竹登志夫名誉教授の講演と、懇親の宴も



河竹登志夫氏



第5回目の「100人委員会」(石毛直道代表)が、5月12日の午後、千代田区丸の内の東京會館で開催されました。会には、石毛代表をはじめ22名の委員が多忙な日程を繰り合わせて出席し、「日本酒で乾杯推進会議」の活動や今後の乾杯運動のあり方などをめぐって意見交換を行ったほか、委員のひとりで早稲田大学名誉教授の河竹登志夫氏が「歌舞伎舞台の酒豪たち」と題して講演。会議終了後には懇親の宴「日本酒文化を味わう会」も開かれ、発足後6年を経過した活動のさらなる深化へ向け結束を誓い合いました。



石毛代表の発声で出席者そろって「日本酒で乾杯！」



出席者の顔ぶれ

(50音順)



秋山 裕一氏
(日本醸造協会顧問)



飯田 博氏
(㈱岡永代表取締役会長)



石毛 直道氏
(国立民族学博物館名誉教授)



上田 博和氏
(日本青年会議所専務理事)
同会議所相澤弥一郎会頭代理



河竹 登志夫氏
(早稲田大学名誉教授)



神崎 宣武氏
(民俗学者)



北本 勝ひこ氏
(東京大学大学院教授)



木村 克己氏
(日本酒スタイリスト)



木村 修一氏
(東北大学名誉教授)



クライナー・ヨーゼフ氏
(法政大学特任教授)



兒玉 徹氏
(日本醸造学会会長)



阪田 美枝氏
(『日本の酒造り唄』著者・2千年紀和紙委員会事務局長)



塩川 正十郎氏
(東洋大学総長)



篠田 正浩氏
(映画監督)



島田 律子氏
(日本酒スタイリスト)



高橋 竹山氏
(津軽三味線演奏家)



滝澤 行雄氏
(秋田大学名誉教授)



辰馬 章夫氏
(日本酒造組合中央会会長)



谷本 互氏
(地域振興研究所常勤理事)



中島 宝城氏
(現代歌人協会会員)



本間 千枝子氏
(作家)



松野 昂士氏
(前北里大学教授)



山本 祥一朗氏
(評論家)

委員会のメンバーは現在 90 名。ホームページの連載コラムも人気

文化、芸術、経済、スポーツなど各界著名人による「日本酒で乾杯運動」の支援組織として 100 人委員会が発足して 6 年。この間、「日本酒と日本文化のルネサンス」という運動の主旨に賛同する有志の輪は順調に拡大してきており、現在委員会に名を連ねる著名人は、5 月 1 日時点で計 90 名（新に 日本青年会議所会頭の相澤弥一郎氏、 地域振興研究所常勤理事の谷本互氏が就任した）を数え、各メンバーそれぞれの分野において、運動の中核組織である「日本酒で乾杯推進会議運営委員会」（西村隆治委員長）とのタイアップにより、公私こもごもの支援活動に取り組んでいます。



具体的な成果も重なってきています。同会議のメンバーが中心となって研究、編纂された『乾

最近の 100 人委員会コラム(掲載順)

- ・金子ひろみ氏 「乾杯エッセイ」
- ・塩川正十郎氏 「日本料理には日本酒が最高だ」
- ・吉沢 淑氏 「酒とコミュニケーション」
- ・高田公理氏 「日本酒をめぐる『邪道』を楽しむ」
- ・市田ひろみ氏 「節目の酒」
- ・山本祥一朗氏 「一緒に歌って盛り上げよう」
- ・浜 美枝氏 「食と酒と人の絆」
- ・西舘好子氏 「日本酒で乾杯」
- ・小泉武夫氏 「居酒屋誕生」
- ・加来耕三氏 「新選組で一番の酒豪は誰か!？」

杯の文化史』(平成 20 年、乾杯の文化史研究会発刊)は、その大きな果実のひとつ。また、推進会議の専用ホームページで連載している「100 人委員会コラム」も好調で (<http://www.sakedekanpai.jp/column/100nin>) 日本酒にまつわる様々な話題をメンバーが軽妙な筆致で綴ったコラムの数々は、恰好の読み物としてサイトのビジターたちの人気を集めています。

日本酒を語れぬ日本人は侮られる時代（石毛代表の挨拶）

100 人委員会の年次会合は、メンバー同士の意見交換と懇親を通じて、今後の運動の方向確認と士気の向上などを図るために開かれるもので、今回の会合には、石毛直道代表らメンバー 22 名のほか、中央会から辰馬会長、福光・浅見両副会長、西村委員長らが参加。石毛代表の開会挨拶に続いて、西村委員長による「日本酒で乾杯推進会議」の活動報告、河竹登志夫氏の講話「歌舞伎舞台の酒豪たち」、意見交換、「日本酒文化を味わう会」での懇親、という順でプログラムが進められました。



挨拶する石毛代表

会の冒頭で挨拶に立った石毛代表は、

「海外での日本酒ブームは、日本料理のレストランだけでなく一般のバーにまで広がっている。既に物珍しさの域を超えて、コミックやアニメなどのジャパン・クールを支える日本文化のひとつに成長したといえるが、翻って日本の状況を見てみると、『ワインを語るのにはカッコいいが日本酒はダサイ』という気分が未だに若者の間に残っているようだ。世界の日本酒人気の高まりを考えれば、日本酒について語れない日本人はむしろ軽蔑の対象であり、我々大人が率先して日本酒を飲み、日本酒で乾杯することで、この状況を変えていくことが大事だ」と訴えました。

一般会員数は2万 4,254 名。「最低でも 10 万に」(西村委員長)



西村委員長

「日本酒で乾杯推進会議」の活動報告を行った西村委員長は、会議の一般会員数が5月時点で初めて2万人を突破した(2万 4,254 名)ことに触れた上で、「まずは当面の目標である3万人をめざし、できれば最低でも10万人までは広げていきたい」と会員拡大へ意欲を強調。

また、平成22年度の活動計画としては、9月30日に開催を予定している「総会・フォーラム&懇親パーティ」(東京會館)について、「今回は高橋竹山氏の三味線演奏を中心に、昨年に引き続き『酒と芸能』というテーマで考えてみたい」と報告しました(主な事業計画の概要については下の囲み記事参照)。

一方、西村委員長は事務局からの提案として『日本酒で乾杯推進会議』5つの誓い(後出)を取り上げ、その趣旨を説明。

「推進会議の考えをまとめたものとしては既に『趣意書』と『日本酒からの手紙』があるが、『5つの誓い』は、それをもう少し短く分かりやすい言葉で要約したもの。『会議の理念と方向、行動指針を、5つぐらいの項目に要約してもらえないか。それを運動拡大のきっかけにしたい』という関係者の声に応えた」と述べましたが、この問題については講話の後の意見交換の時間で改めて議論することとなりました。

日本酒で乾杯推進会議の主な活動計画(22年度)

1. 会員の拡大 当面3万人の達成を目指す。
2. 総会・フォーラム・懇親パーティの開催
 - ・日 時 平成22年9月30日(金) 16時~20時30分
 - ・会 場 東京會館
3. 地方大会(奈良大会)の開催
 - ・日 時 平成22年10月16日(土) 14時30分~19時15分(予定)
 - ・会 場 奈良県新公会堂 能楽・レセプションホール
4. 支持基盤の拡大
 - ・関係機関・諸団体に働きかけ運動基盤の拡大を図る。
5. インターネット・メディアの展開
 - ・メールマガジンの発行継続、100人委員コラムの充実

河竹氏の講話 - 異彩を放つ「歌舞伎の酒豪たち」の飲酒ライフ

河竹登志夫氏の講話「歌舞伎舞台の酒豪たち」は、江戸歌舞伎の中で異彩を放つ様々な酒豪たちを取り上げ、その酒量や酒の飲み方などを紹介したもので、江戸っ子や武士の生活、更には芝居文化の中に酒がどれほど深く関わっていたかを知り得る興味津々のお話となりました。

河竹氏は、幕末から明治にかけて活躍した歌舞伎作者・河竹黙阿弥の曾孫で、大正13年東京生まれ。2000年に恩賜賞・日本芸術院賞を受賞した『河竹登志夫歌舞伎論集』、黙阿弥から4代にわたる河竹家の歴史を綴った『作者の家』(毎日出版文化賞、読売文学賞)などで高い評価を受ける一方、歌舞伎の演出・企画などの仕事にも携わり、2001年にはこれらの業績により、文化功労者に選ばれています。



河竹氏の講話風景

現在も早稲田大学名誉教授をはじめ日本演劇協会名誉会長、日本舞踏協会副会長などの要職にあって、この5月からは日本経済新聞で『私の履歴書』の連載がスタートしたばかりと、その活動には全く衰えが見られません。

名優 6 代目菊五郎の貴重な舞台録音も

お話の中で河竹氏は、曾祖父・黙阿弥の手になる「慶安太平記」や「大杯觴酒戦強者」、さらには定番の「勸進帳」「仮名手本忠臣蔵」などから、名だたる酒豪を選んでその飲みっぷりを解説。「歌舞伎では酒を飲む場のない芝居を探すのは難しいくらいだが、当時の酒豪と呼ばれた人がどれほどの量を飲んでいたかは実際にはなかなかわからない。ただ『大杯』には『一升前後にて二升と過ごすものなき』というセリフがあるので、昔でも一升前後が酒飲みの標準だったことがわかるが、『慶安太平記』の丸橋忠弥は、泥酔の中間を装って江戸城の掘の深さを測ろうとして、朝から少なくとも4升は飲んでいる。もっとすごいのは『勸進帳』の弁慶で、「ほぼ一斗の酒を飲んだ後に延年の舞を見事に舞い納める」など、ユーモア交じりの説明で出席した委員を楽しませました。

また、お話の最後には、名優 6 代目菊五郎が昭和初期に残した珍しい録音（黙阿弥作『新皿屋舗月雨暈（魚屋宗五郎）』磯部邸庭先の間）も披露され、どの委員も、そのリアルで味わい深いセリフ回しに聞き入りながら、江戸庶民と酒の付き合いに思いを馳せている様子でした。

推進会議「5つの誓い」などをめぐって活発な意見交換

続いて行われた意見交換の時間では、推進会議の「5つの誓い」や今後の運動の進め方などをめぐって、委員の間から様々な意見が示されました。

このうち、「5つの誓い」については、

「日本は世界でも稀な平和憲法を持っている。そういう国の酒として、『誓い』の中にも健康、世界平和などの一言を入れてほしい」（木村克己氏）

「『誓い』の内容は内向きで自分たちの決心ばかりという感じがする。もっと外に呼びかけるような言葉にしたほうがいいのでは？」（本間千枝子氏）

「簡潔にできていると思うが、日本文化、日本酒を愛するということがナショナルな運動と誤解される恐れがある。そうした排他的国威発揚主義とは異なり、日本酒以外のお酒、日本以外の文化にも敬意を払う運動であることを業界として了解しあった上でなら、この文言で結構だと思う」（石毛代表）

「第3項目で日本の食文化に触れているが、実はいま伝統食ということで地中海食と和食が非常に注目されており、国際医学雑誌などで毎月のように取り上げられている。日本酒も心臓病の改善や認知症の防止に効果があることが分かっている。『誓い』にもこうした点を盛り込んで、長寿には日本酒がいいということを出すべきだ」（滝澤行雄氏）

などの指摘が出て、「運営委員会で更に内容を議論していく」（西村委員長）こととなりました。

- 「日本酒で乾杯推進会議 5つの誓い（案）」
- 一 日本を愛し、「日本人の品格」を高めます。
 - 二 日本文化を愛し、「伝承と創造」をめざします。
 - 三 日本酒を愛し、「日本の食文化」を世界に広めます。
 - 四 日本のかたち、日本のこころを研究し、乾杯の文化の確立をはかります。
 - 五 日本酒で乾杯と運動を全国に展開します。

「多様性を重んじる“和の総本家”としての使命果たす」(辰馬会長)

一方、今後の運動の進め方については、

「酒は外で飲むものという固定観念を変えることが必要。食卓において、父親がお酒を飲みながら母親や子どもと一緒に話を楽しむ場になれば、家庭の雰囲気が変わってくる」(秋山裕一氏)「乾杯運動がマスコミで取り上げられるよう広報に力を入れてほしい。また、日本酒好きな著名人に、元気なお年寄りも含めてもっと運動に参加してもらおう工夫も必要」(山本祥一朗氏)

「私の研究室では『日本酒で乾杯』を心がけているが、一般の学生が日本酒で乾杯している姿はあまり見かけない。推進会議の会員になるとイベント案内などの特典が付くのだが、もっと積極的な仕掛けがあれば学生にもアピールできる」(北本勝ひこ氏)

などの意見が示されたほか、木村克己氏が「乾杯の器」の試作品(写真右)を披露したのに対し、木村修一氏からは「日本酒で乾杯の賛同者は私の回りにも多いが専用の器はぜひ必要。早く開発してほしい」といった意見も。



また、日本酒の健康効果についても、「酒を飲めなかった家内が日本酒を飲むようになってとても丈夫になった。日本酒が体にいいことを徹底的にPRすべきだ」(飯田博氏)「酒は健康に悪いというネガティブなイメージを正すには医学的なアプローチが必要」(クライナー・ヨーゼフ氏)などの意見が相ついだほか、本間千枝子氏からは「今は子供の食育よりも大人の食育が必要な時代。<大人の食育は日本酒で乾杯から>といったコピーで、推進会議が自ら大人の食育を始めてみるのもいい」という興味深いアイデアが出され、西村委員長も「真剣に検討してみたい」との考えを示しました。



辰馬会長

会議の最後には辰馬会長が挨拶。「自然の恵みに育まれてきた日本酒にとって、地球環境を守ることは蔵元の社運が掛かる最重要テーマ。環境を守るには自然に謙虚になって、生物の多様性、共に生きる気持ちを尊重することが大切であり、『誓い』の内容も、お互いの違いを認め合う形で、我々の気持ちを示すことが大事だ。今後も気を引き締めて、“和の総本家”としての使命を果たしていきたい」と述べて、運動への決意を示しました。

全国の日本酒 20 銘柄と和洋の佳肴を囲み歓談のひととき



最後は福光副会長の発声で「乾杯三唱！」

100人委員会終了後には、恒例の「日本酒文化を味わう会」が開かれ、冒頭、石毛代表の発声により「日本酒で乾杯！」の杯を掲げた後(表紙写真)、会場に用意された全国各地の日本酒 20 銘柄や和洋の佳肴を味わいながら、出席者全員で歓談のひと時を過ごしました。和やかに盛り上がった会場の様子は、次頁の写真でどうぞ。



乾杯!
カンパイ!
かんぱい!

